

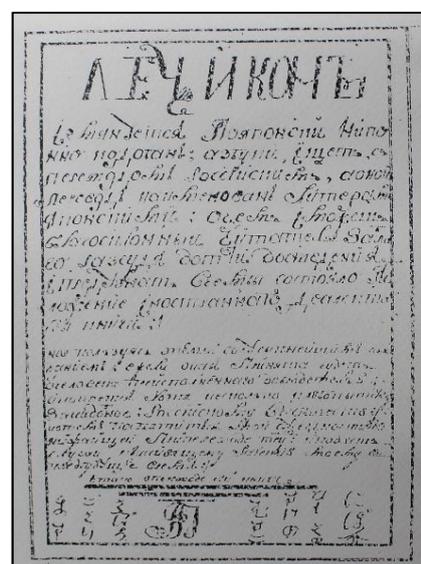
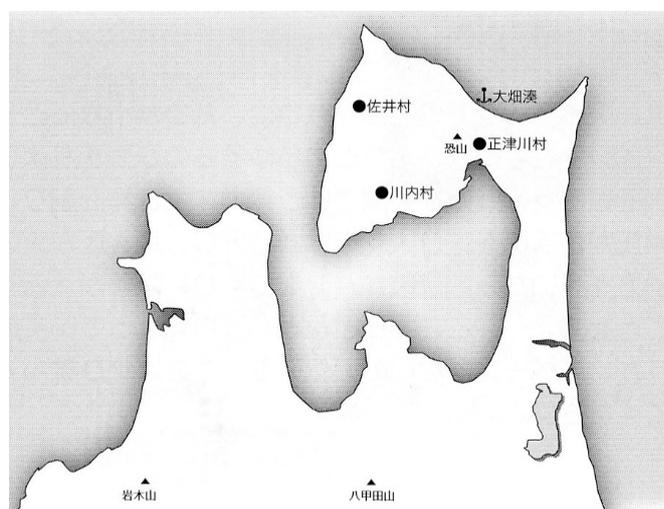
地域教材としての民衆個人史 下北三人衆 ～ 三之助・寅吉・五郎治 ～

瀧本 壽 史

歴史教育における地域教材の中でなかなか見つからないのが、権力者や功成り名を遂げた人物ではない、農山漁村などに生きた民衆個人の記録です。しかしながら、わずかに記録が残っている同時代の民衆を何人かまとめて見ることで、歴史認識を深めていくことも可能になります。ある民衆の個人史にその時代のありようが凝縮されていた場合、いわゆる著名人の「伝記」教材以上に、人々が生きた「時代」と「地域」を照射できるからです。通史が地域史と結びつく瞬間、地域史が通史となる瞬間と言えるかも知れません。

江戸時代後期、日本と世界を結んだ下北出身の蝦夷地（北海道）への出稼ぎ民衆三人を紹介しましょう。江戸時代、普通の個別的な民衆の人生が記録されるということはほとんどありません。この三人はどのような契機でその人生を察知させたのか。それは、帝政ロシアの極東政策による対外危機でした。

1774年、三之助は佐井村伊勢屋の船乗りとして大畑湊から江戸に向かう途中遭難し、半年の漂流後、千島のオンネコタン島に漂着。ロシア人に救助され、極東政策の拠点イルクーツクで日本語教師となり、ロシア人と結婚しました。息子のアンドレイ・タターリノフが編さんした露日辞典「レクシコン」は、1792年のラクスマンの根室来航の際に活用されています。井上靖『おろしや国酔夢譚』は1782年に漂流した伊勢の大黒屋光太夫を扱ったものですが、光太夫がイルクーツクで三之助の子どもに会うという驚きの脚色をしています。



左：下北三人衆関係地図

右：露日辞典「レクシコン」の序文（村山七郎『漂流民の言語』吉川弘文館 1965年 所収）

序文下にひらがなで「にぼんのひと さのすけのむすこ さんばち ごさります」とあります

1799年、摂津の海運業者、高田屋嘉兵衛は幕府の命で北辺警備のために国後一択捉間の航路を開きました。いわゆる択捉「開島」ですが、嘉兵衛の番人として択捉の漁場を実質的に開いたのが正津川村の寅吉でした。当時ロシア人との交渉はアイヌ語を介して行われましたが、寅吉はアイヌ語にも通じており重用されました。嘉兵衛の生涯を描いた司馬遼太郎『菜の花の沖』には寅吉がしばしば登場します。

1807年、ロシア使節レザノフの通商要求を幕府が拒絶したことから、ロシアによる択捉などの日本施設襲撃事件が発生。寅吉は果敢に応戦して負傷。この時捕らえられオホーツクに連行されたのが川内村の五郎治でした。その後イルクーツクに移されますが、日本に捕らえられていたゴロウニンの交換要員として高田屋嘉兵衛とともに5年後に帰国しました。寅吉と五郎治はともに嘉兵衛ともつながっていたわけです。五郎治はロシア捕囚中に種痘術を習得し、ジェンナーの牛痘法のロシア語訳「オスペン・ネ・ケニガ」を持ち帰り、1824年、松前地方で天然痘が流行した際、日本で初めての種痘を実施しました。吉村昭『北天の星』は五郎治の苦難の人生を描いています。

三人の人生は対外危機という江戸時代の大きな転換点の中で翻弄された一生でした。国家と社会の基本的な枠組みの中に彼らを置いたとき、個々の違いよりも、彼らの生きた時代と地域の特質、さらには彼らに共通した人格的範疇が見えてくるのではないかと思います。地域教材は時代を見る眼、地域を見る眼を養い、歴史の形成者としての自覚を私たちにもたらしてくれるのではないのでしょうか。

弘前大学教職大学院では「地域課題」がよく議論されます。地域課題は地域教材と結びつくことも多くあります。今回は歴史教材の視点から「下北三人衆」（瀧本命名）を紹介しました。